11

国　語　問　題　紙

経営学部１部（経営情報学科）
法 学 部１・２部

2023 年 2 月 11 日

11：50 ～ 12：50（60分）

注　意　事　項

── 注意事項は裏表紙にもある。問題紙を裏返して必ず読むこと。──

１．国語の問題紙は全24ページである。

２．解答用紙は問題紙の中に折り込まれている。

３．解答はすべて解答用紙の指定された欄に記入すること。

４．試験開始の合図があるまで問題紙を開いてはいけない。

試験終了まで退室してはいけない。

５．受験番号の記入については裏表紙を参照すること。

国 一

次の文章を読み、後の設問に答えよ。

書籍の帯文というものは、基本的には編集者が考えることになっている。本が書店から取次に返品され再度出荷される時には、改訂された新しい帯や重版や受賞などの吉報を添えた帯が巻き直される。この重要な販促ツール、少なくとも文言案は編集者が出し、書き手と相談し、より届く言葉を探し出す。夜中に書いて翌朝読めば赤面してしまうラブレターのような文言になりがちだが、逆にこれくらい強いほうがこの本の想いを伝えられるはず、手に取ってもらえるはずといきり立った企みが、ホントにただの逆効果だったりする。毎日二〇〇冊を超える書籍が世に出ているが、その中から手に取ってもらえる、多種多様の主張を押しのける帯文を編み上げるのは簡単ではない。

七年間ほど編集者をやっていたが、ある時「これは、誰が待望しているの？」と上司に冷たくあしらわれたことがある。ある本の文庫化の帯文言を「待望の文庫化」で締めたのである。一体、誰が待望しているというのか、と問われ、返答にキュウ[a]する。単行本を買った人は文庫化を待望していない。単行本では買わないなぁ、文庫でなら買ってもいいけれど、程度に思っていた人は、決して待望しているわけではない。瞬時にチョウ[b]達した言い訳は「待望の、と書いておけば、みんなが待望するだけの作品なのだから、面白いに違いないと、未知の方が手に取ってくれるんじゃないか」というもの。うまく逃げきれた気もしたが、書籍の帯という、店頭で一秒でも見てもらえればオン[c]の字のポジションに、これだけ長い言い訳を必要とする時点で効果的ではない。

あろうことか、「待望の文庫化！」と、「！」まで付けてしまっていた。一体、誰の感嘆だというのか。正体不明の「待ち望んでいる人」にすがったこの空回りを恥じながら書店に出向くと、文庫売り場ではあらゆる文庫化が待望されているのであった。売り上げランキングのコーナーには、フォトショップで肌をすっかりキレイにしてもらった人気女優の写真の横に、「号泣しながら、一晩で一気読みしちゃいました」と手書き文字を添えてある帯。発生源が不明の「待望」では、この帯には勝てない。女優の涙を感知して手に取る。[1]知らない誰かの待望をともにするよりも、確かな涙を流したいではないか。

「批判するのは簡単だけど、褒めるのは難しい」と言われる。芸能人にまつわる原稿をネット上に放つと、おおよそその言葉と同質の反応がそれぞれのファンから返ってくる。その反応こそ簡単に繰り返されているけれど、とにかく、チミ

のような指摘など誰にでもできると言う。この弁には安手のトリックがある。彼らには、褒めていなければ批判であるし、同調していなければ反意であるとする考えが通底している。批判するのは簡単、という言葉が簡単に流布されるのは、同調の結束を高めるためであり、自分たちが日頃愛でるため褒めるために使っている言語に更なる意味を持たせるためでもある。あらゆる熱烈なファンは、押し並べて同様の反応を見せる。ただ単に仲間同士で承認されている褒める言葉が少ないという内輪の事情で「褒めるのは難しい」を使う場合が多い。ならば、[2]「批判するのは簡単」という定義は、はなはだ怪しくなる。

批判する方法と比べて、褒め讃える方法は本当に手持ちの駒が少ないのだろうか。文庫化の存在を褒め讃えるためには、知らない誰かに待望してもらうしかなかったのだろうか。仮に、「褒めるのは難しい」と思っている人に「これは褒めている」と思ってもらうための選択肢が狭まっているのだとすれば、それは、発せられた言葉のバラエティや精度の問題ではなく、ただただ、言葉を受け取る側の問題、懐のサイズに起因しているのではないか。あらゆるマーケティングが買い手を最大化させるための言葉を捻出すると、その言葉はすっかりのっぺりと均一化した言葉になる。褒めるのは難しい、ではなくて、褒める言葉が限られているのではないか。

例えば「新進気鋭」の学者は、これまで何人、世の中に生まれてきたのだろう。若い学者が博士論文をまとめて指導の教授や周囲の教授から推薦コメントをもらった後に、処女作の帯にメインに掲げられるのは「新進気鋭」だ。あらゆる言葉はある瞬間や機会で意味が最大化される場面を持つのだろうが、「新進気鋭」はおそらく若手学者の処女作で最大化される。これ以上ない適役なのだ(ところで、この本にはどんな言葉が投げかけられたのだろう。「新進気鋭」かもしれない)。

クールビズの初日くらいしかアロハシャツを着られるタイミングがないように。わざわざ大寒の日にふんどし一丁で海に入っていく行事があるように。そのアロハやふんどしは、確かに毎年、今日しかないタイミングなのだけれど、そのタイミングしかないからといって、そこでアロハを着ること、ふんどしで海に入ることが手放しで肯定されているわけではない。[3]その判断が〝適切〟であることと〝最適〟であることは違う。テレビカメラは嬉々として毎年同じ光景、クールビズの初日に恥ずかしそうにアロハを着てきた課長を撮り、寒風吹きすさぶ中、荒波に駆け込んでいった後の「さぶい〜」を撮る。それを見て私たちは笑う。毎年のように笑う。彼らにとってのアロハの必然性、ふんどし一丁の必然性が、こちらには「なんでまたその選択肢なの?」と喜劇性を持って伝えられるからだ。確かにその日ならではのものではある。でもそれを毎年繰り返している。「新進気鋭」という言葉もそれに近いのではないか。今しか使えない絶賛だが、何度か「今

しかない」サイクルを知ると、すっかり鮮度のないリフレインだと気付く。

　選挙が行なわれる度に選挙ポスターを舐めまわすように凝視しているが、若手候補の売り出し方の近似が気になってしまう。自分ならではの初々しさを打ち出してみたつもりなのだろうが、定点観測している身からすると、「新進気鋭」と同様に、賛意を促す文言があまりにも類似していて歯がゆい。「若さで改革！」「フレッシュ革命！」「日本のために汗をかきます！」「二児のパパ、国政にチャレンジ！」等々。蛇足ながら、子どもを抱えてポスターに写る新人には「これをやったら姑息と思われるかもしれない」というガードが働いていないという点で投票を避けてしまうのだが、ここでもまた、言葉のバリエーションが足りていないようなのだ。

　「批判するのは簡単だけど、褒めるのは難しい」。いいや、褒めるのは難しいのではない、褒めるのにはただただパターンが足りていないだけだ。

　そこまで駆使できていないがツイッターを遅ればせながら始めて感じたのは、批評者と対象者（作者）の馴れ合いだ。「A（作品名）について、B（肯定的な意見）と感じました」と書けば、Aの作者から「そうなんです、よくぞBという本質に気付いてくれました」と返ってくる。開かれた場でそのやり取りが行なわれる以上、その作品Aに対する屈強な評価軸として周囲に広まっていく。作品AはBと評されるべきであるとしたことにAの作者が賛同している中で、「いいや、これはCではないか」と異なる意見を投じる難しさがある。この流れのどこに「褒めるのは難しい」が泳ぎ渡っているのだろう。一体、難しいのはどちらなのか。

　熟知と評価は違う。評価の最高峰に熟知があると思っている受け手が多い。Aの作者に「そんなことがよく分かりましたね」と言われても、それが熟知とは限らない。しかし今、別の意見Cを投じる批評が薄まっているのは、Aの作者がBに賛同している状態が、「批評の完成系」として咀嚼されていて、そこから逸脱するCは、たちまち「disる」という流行言葉で処理されてしまう。

　絶賛にしろ、批判にしろ、言葉を尽くした細やかな考察がそこまで待望されないのは、[4]Aの作者である当事者が、批評を操縦するイニシアチブを持ってしまっているから。アマゾンのレビューに☆二つを付けてCであると言っている人がいるけれど、これは全くお門違いで☆五つ付けてくれたBが正しいんだよとAの作者が言った時、Cという見解はAの作者に帰属する人たちから袋叩きに遭う。この構造は、批評をどこまでも矮小化させていく。SNSの世界ではしばしばこう

いうことが起きる。

これでは、絶賛の言葉も批判の言葉も成長しない。しかし、絶賛の言葉は、成長しなくともひとまず歓迎はされる。disられはしない。だからこそ、手垢のついた「待望の文庫化」や「新進気鋭」は、改訂される機会を持たないまま、いけしゃあしゃあと流通していく。例えば、「全米が泣いた」というハリウッド映画の宣伝文句は繰り返されてきたけれど、これほど大雑把な言葉遣いが見過ごされるのも、それが絶賛の言葉に分類されるからだ。立ち止まって、ところで全米とは誰なのか、という問いを真顔で投げかける機会は持たれなかった。もしもその映画に対して「全米じゅうが怒ってるよ」と告げ口をした場合、たちまち、全米とは一体誰なんだよ、と問われるだろう。でもそれは、いつもオマエらが平気で使ってるアプローチじゃんか。

肯定や絶賛はディテールが問われない。吟味する必要がないからだ。就職活動において多くの学生が頭を抱え、抱えたまんま人間不信におちいるのは、面接で「あなたの長所は何ですか？」と問われたっきり、後日封書で「今回はご縁がありませんでした。ご多幸をお祈りします」と人格を否定されるからである。彼らは就職セミナーの類いに座ったとたんに、「自己分析せよ」と指図されてきた。面接当日には、多少の短所を交えつつ、自己分析した長所を絞り出し、自分なりに長所が上回るようにプレゼンする。にもかかわらず、「ご縁がない」と否定され続ける。肯定の要素を自家チョウ達して案配を整えたのに、届きませんでしたと縁を切られる残酷さ。シューカツでメンタルをやられやすいのは、否定され続けるからではなくて、肯定したのに否定され続けるからだ。

胸を張れるほどの肯定を自分の人生から引っ張り出すことは簡単ではない。しかもその私的な肯定を必死に公的化しなければいけない。おばあちゃんが病に倒れた時、真っ先に病院へ駆けつけた話をしても面接官には響かない。オリジナルブレンドでは「肯定」を作れないから、ガイド本を手にして、推奨されている肯定に準じていく。社会学を教える大学教授の知人が嘆いていたが、自分の教え子が横並びで東南アジアへ、短期留学のボランティア活動に出かけていくという。理由を問うと「就職に有利だと聞いたので」。肯定の公的化のメソッドをみんな一緒に仲良く(d)トウ襲する。

「自慢」の反対語は「自嘲」だが、コミックエッセイにしても、自己啓発系の本にしても、今の流行本の多くには「自嘲」が含まれている。自分を自分で褒められない場合、自分の体に合うようにこれらの自嘲を調合して日々のハードルを下げ、あるいは取っ払って、批判が入り込みにくい体を作る。この作業に慣れてしまうと、ハードルを下げた分、肯定し続ける

ことはできるけれど、向かってくる批判への抗体はすっかり弱まってしまう。

シューカツでは、肯定してみてください、否定もしてみてください、さぁどうぞ、と短時間で迫られ、最終的に肯定を引き立たせたプレゼンをしなければ通らない。コミックエッセイ的な自嘲では、求められているバランスを築くことはできない。このバランスと戦略的に向き合わないと、何十社受けても、やる気だけはあります、絶対に御社に貢ケン[e]する人材になりますと、気合いの言語を空焚きし続けることになる。

ライターの北尾トロは、コラムニストのえのきどいちろう、編集者・ライターの新保信長との鼎談で、帯文に躍る「渾身」が気に食わないと吐露する。

「帯の文に『渾身の』を安易に付けとく、みたいな風潮がさ。オレは『渾身』慣れしてるから、あ、また『渾身』だ！って目に付く」

この「渾身」の内情は、肯定感の押し売りだ。今回頑張りましたので泣いてください、だ。でも、「私、頑張ってるので御社に入れてください」では面接に落ちる、あのパターンだ。器用に使ったつもりだが、とにかく切実さが生じない。その欠点に気付かないふりをして「渾身」を使い続けていると、周りが渾身だらけになっていることを忘れてしまう。「待望の文庫化」と同様に、本屋じゅうで浮気を繰り返す尻軽ワードだと気付かぬまま、「渾身」を使ってしまう。

絶賛の言語に跳躍力を持たせるためには、絶賛を受け止める前に、裏返して考えてみるといい。「全米が泣いた」時に南米が怒り狂っている可能性を考えてみる。「全米が泣いている」間にアジアは眠りこけているのではないか。[6]物事を多方面から見ることを怠らなければ、「絶賛」「待望」「渾身」は、順当に賞味期限を迎えていくのではないか。良し悪しを決める時に、良しを知って悪しとして、悪しを知って良しとするように心がければ、肯定言語も批判言語も浮つかないはずだ。その取り組みを怠りすぎている。

未だに全米が泣いていて、文庫化が待望され続けているのは、ただ単に、絶賛・批判の天秤が絶賛に寄りまくっているくせに「釣り合っている」と言い張ってくるからにすぎない。ちっとも釣り合ってなんかいない。他人様の悪口をみんなではね除けることを絶賛のガソリンにしているくせに、これが「絶賛と批判のベストミックス」状態だと言い張る。

嘘だ。その欺瞞、いつもの絶賛で済ましてしまう態度が、絶賛の跳躍力を奪っているのではないか。なにかと絶賛へ向かい、絶賛に落ち着きたがる昨今のあらゆる作業工程。少しばかり絶賛と批判のバランスが是正されれば、渾身の絶賛語

国

が新たに生まれるのではないだろうか。

（武田砂鉄『紋切型社会』による。ただし一部変更した。）

問一　波線ａ～ｅのカタカナを漢字に直した場合と同じ漢字を用いるものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ａ　キュウする
ア　老キュウ化した建物がある。
イ　会議が紛キュウする。
ウ　生活に困キュウする。
エ　キュウ陵地帯の道路を行く。
オ　電子機器が普キュウする。

ｂ　チョウ達
ア　格チョウの高い文章を読む。
イ　裁判を傍チョウする。
ウ　あの人の行為は愚の骨チョウだ。
エ　成果を誇チョウして発表する。
オ　故人の通夜にチョウ問する。

ｃ　オンの字
ア　乾杯のオン頭を取る。
イ　強いオン念を抱く。
ウ　謝オン会に参加する。
エ　心よりオン礼申し上げます。
オ　平オンな日常が続く。

d　トウ襲

ア　戸籍トウ本が必要になる。
イ　病トウが不足する。
ウ　学生を薫トウする。
エ　飛行機にトウ乗する。
オ　全てのルートをトウ破する。

e　貢ケン

ア　オゾン層は成層ケンにある。
イ　ケン実な作戦をとる。
ウ　収賄のケン疑がかかる。
エ　信頼できる文ケンで確かめる。
オ　ケン賞に当選する。

問二　傍線1「知らない誰かの待望をともにするよりも、確かな涙を流したいではないか。」とあるが、どういうことか。最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア　書籍の帯に人気女優の写真を付けた方が、そうではない書籍の帯よりも、帯が付けられた書籍の素晴らしさを伝えやすいということ。
イ　どこの誰だか分からない編集者による賞賛の言葉よりも、有名人による感動の言葉を書籍の帯に載せた方が、書店員の評価を得て、その書籍を書店内の目立つ場所に置いてもらいやすいということ。
ウ　書籍の帯に掲載する賞賛の言葉には、手書き文字を使う方が、そうでない方よりも、書店の店頭で書籍を見かける人の目をひきやすいということ。
エ　誰によるものであるのかが分からない匿名の賞賛の言葉よりも、誰によるものであるのかが明確でイメージしやすい感動の言葉の方が、書店の店頭で書籍の帯を見る人の心に響きやすいということ。
オ　書籍の帯に掲載する賞賛の言葉には、感情をあらわにするような文言を用いた方が、そうでない方よりも、書店の店頭で書籍の帯を見る人に信用してもらいやすいということ。

国

問三 傍線２「「批判するのは簡単」という定義は、はなはだ怪しくなる」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア　それぞれの芸能人のファンが、あたかも、その芸能人を賞賛し自分たちの間での同調の結束を高めることが難しいかのように装うために、「批判するのは簡単」といったような言葉を用いるから。

イ　それぞれの芸能人のファンが、広く受け入れられる形でその芸能人を褒めることができないので、負け惜しみのように、「批判するのは簡単」といったような言葉を用いるから。

ウ　それぞれの芸能人のファンが、その芸能人に対する賞賛と批判、および、自分たちに対する同調と反対を明確に判別できないために、「批判するのは簡単」といったような言葉を用いるから。

エ　それぞれの芸能人のファンが、その芸能人を賞賛する言葉が一般的に少なく、自分たちの間での同調の結束を維持できないので、批判者や反対者に対抗するための絶好の理由として、「批判するのは簡単」といったような言葉を用いるから。

オ　それぞれの芸能人のファンが、賞賛と批判の間、同調と反対の間に様々な意見が存在し得ることを無視して、自分たちに同調する者以外は全て批判者・反対者であるとするために、「批判するのは簡単」といったような言葉を用いるから。

問四 傍線３「その判断が〝適切〟であることと〝最適〟であることは違う。」とあるが、「新進気鋭」という言葉との関係で、この一節はどのようなことを意味するか。最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア　若手学者のデビュー作の帯で「新進気鋭」という言葉を掲げることには、その作品をアピールする最大の効果を期待し得るが、他方で、その帯を見た人から笑われる可能性が生じるという危険もあり得るのではないか、ということ。

イ　若手学者のデビュー作の帯で「新進気鋭」という言葉を掲げることは、その時しかないというタイミングでなされたものと評価されるが、その言葉を延々と繰り返しどの若手学者に対しても使わなければならないわけではないのではないか、ということ。

ウ　若手学者のデビュー作の帯で「新進気鋭」という言葉を掲げることは、指導の教授や周囲の教授からの推薦に基づくという点で適切であるが、書店の店頭でその帯を見る人にアピールするために最もふさわしいとは限らないのではないか、ということ。

エ　若手学者のデビュー作の帯で「新進気鋭」という言葉を掲げることは、その時しかないというタイミングでなされたものと評価されるが、真の意味で「新進気鋭」と評価される若手学者は一人しかいないのではないか、ということ。

オ　若手学者のデビュー作の帯で「新進気鋭」という言葉を掲げることは、その時しかないというタイミングでなされてはいるが、そのような言葉を使用してはいけない場合もあるのではないか、ということ。

問五　傍線4「Aの作者である当事者が、批評を操縦するイニシアチブを持ってしまっている」とあるが、どういうことか。最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア　Aという作品の作者自身が、Aに対する特定の肯定的な意見を開かれた場で表明するように裏で誰かに依頼することによって、Aに対する批判を出すことを封じ得るということ。

イ　Aという作品の作者自身が、開かれた場で、Aに対する特定の肯定的な意見を絶賛し、それとは異なる意見を厳しく批判することによって、それとは異なる意見を出しにくい雰囲気を作り得るということ。

ウ　Aという作品の作者自身が、開かれた場で、Aに対する特定の肯定的な意見に同意を与えることによって、それとは異なる意見を出しにくい雰囲気を作り得るということ。

エ　Aという作品の作者自身が、Aに対する肯定的な意見を開かれた場で広く募ることによって、Aに対する批判的な意見が出ることを防ぎ得るということ。

オ　Aという作品の作者自身が、開かれた場で、あらかじめ、「Aの本質はこういうことである」という理解を表明することによって、Aに対する批評を特定の立場に誘導し得るということ。

問六　傍線5「その私的な肯定を必死に公的化しなければいけない」とあるが、どういうことか。最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア　自分の人生から引っ張り出した自分の長所を、希望する会社に入りたいという私的な動機のためにプレゼンするのではなく、公の利益のためにプレゼンしなければならないということ。

イ　自分の人生という私的な領域から引っ張り出した自分の長所を補強するためには、ボランティア活動のような公的な活動をしなければならないということ。

ウ　自分の人生という私的な領域から引っ張り出した、自分の主観では評価できる長所についてのプレゼンを、就職活動のための面接という公的な場で行わなければならないということ。

エ　自分の人生という私的な領域から引っ張り出した自分の長所についてプレゼンする際には、公にガイド本で推奨されている方法に従わなければならないということ。

オ　自分の人生という私的な領域から引っ張り出した自分の長所を、主観的にのみ評価するのではなく、公に評価されるような活動と結びつけなければならないということ。

国

問七　傍線6「物事を多方面から見ることを怠らなければ、「絶賛」「待望」「渾身」は、順当に賞味期限を迎えていくのではないか。」とあるが、どういうことか。最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア　ある物事を評価する際に、その物事に対する賞賛だけではなく批判があり得ることを考えてみることを続けていけば、無内容な賞賛の言葉や主語が不明確な賞賛の言葉が濫用されることはなくなっていくのではないか、ということ。

イ　ある物事を色々な角度から見ることを心がければ、「絶賛」「待望」「渾身」という言葉は、賞賛のための言葉というよりもむしろけなすための言葉であると評価されて使われなくなっていくのではないか、ということ。

ウ　ある物事を賞賛する際に、誰が賞賛しているのかということを明確にしたうえで、別の主語を用いたらどうなのかということを考えることを心がければ、「絶賛」「待望」「渾身」という言葉は、受け手に訴求する効果を失うのではないか、ということ。

エ　ある物事を賞賛する際に、賞賛の仕方には多様なものがあるということに注意していれば、「絶賛」「待望」「渾身」だけではない、新たな賞賛の言葉を生み出せるのではないか、ということ。

オ　ある物事を色々な角度から見ることを心がければ、その物事を賞賛する可能性はなくなり、「絶賛」「待望」「渾身」といった言葉が使われることもなくなっていくのではないか、ということ。

問八　次の文のうち、本文の内容に合致するものを**二つ**選び、符号（ア～カの順）で答えよ。

ア　人や物事を賞賛する際に感嘆符を用いると、賞賛の言葉が空回りするため、感嘆符を用いるべきではない。

イ　人や物事を賞賛する言葉の選択肢が狭まっていることについては、賞賛の言葉を発する側に全ての原因がある。

ウ　ツイッターのような開かれた場で批評者と批評の対象となる作品の作者との間で、その作品に関する肯定的なやり取りが行なわれることは、批評のための言葉の成長を妨げる原因となる。

エ　使い古された決まり文句のような賞賛の言葉が延々と用いられ続けるのは、そのような言葉がとりあえずは受け手に受容されるからである。

オ　就職活動で多くの学生が頭を抱え、抱えたまま人間不信になる本質的な原因は、就職活動のガイド本で推奨されている方法に従ってプレゼンをしたにもかかわらず、そのことが成果につながらないことが多いからである。

カ　絶賛と批判のバランスが絶賛の側に寄りすぎている現状が是正されれば、「全米が泣いた」「待望の文庫化」といった言葉も、再び新鮮なものになると考えられる。

国

二

次の文章を読み、後の設問に答えよ。

古代アテナイの市民たちは、権力の私物化を禁じ、反専制政治を実現するために、クジと輪番制という制度を採用した。それは、政治の専門化ないしエリート化こそ、それらの専制政治の元凶だということを彼らが経験していたからである。翻って言えば、民主主義の理念を実現するには、クジと輪番制によって政治権力を行使する上での平等を徹底することが最適だと知っていたからだ。誰もが政治権力を直接行使できれば、権力の私物化は難しくなる。これに対して、近代の民主主義は、専制政治に対抗する手段として、平等性をタン保するクジという手続きではなく、代表者を選ぶ選挙という手続きを重視した。それはなぜなのか。ここでは、正統性という言葉に注目してその理由を考えてみる。

古代と近代の民主主義の差異の一つは、民主主義の理念を実現しようとする上で、前者が市民による政治権力の行使の平等性に依拠したのに対して、後者は、政治権力の行使に対する同意としての正統性に依拠した点にある。近代の民主主義が同意による権力の正統化に非常にこだわったわけを理解するには、その復活に大きく関わる近代市民革命の核心に何があったかを見る必要がある。

近代に民主主義を復活させた一八世紀の二つの革命、すなわち、アメリカ独立革命とフランス革命、そしてそれらに先行した一七世紀のイングランドでの二つの革命は一般に、市民革命と呼ばれる。これらの革命に共通する核心的なモットーは、ジョン・ロックの「本来、万人が自由平等独立であるから、何人も、自己の同意なしにこの状態を離れて他人の政治的権力に服従させられることはない」という有名な一文にある。そこで言い表されているのは、「あらゆる権力の行使が唯一正統な形で行われるのは、それに従う者の同意がある場合のみである」という政治的正統性についての考えだ。

この考え方は、グロチウスやホッブズ、プーフェンドルフらに始まる近代自然法学派の下で社会契約論として発展してきた。この学派――実定法を超える普遍の法としての自然法を理性の法として世俗化＝非宗教化した――に多くを負うロックは、当時の絶対王政に正統性を付与した王権神授説を批判するために、この同意としての正統性を掲げた。

さらに、ルソーが政治権力の正統性に関する理解をさらに発展させる。彼は、唯一正統な権力の行使を人民の意志に基づかせることで、君主主権論に対抗する人民主権論を打ち立てたのだ。このように、近代の民主主義の始まりには、神とその代理人である国王ではなく、国家を構成する人間たちの間の同意に政治権力の源泉と正統性を見出(みいだ)そうとする理論と実践が活発化していた。そしてフランスでの市民革命だ。そこで、人民主権論は何より、権力を私物化し専制政治を敷い

た国王に対抗する正統性のイデオロギーとして理解され、新たな政治体制の構築のための根本原理として用いられた。

このように、近代の民主主義の始まりには、同意による権力の正統化の問題があったことが見て取れる。また、それゆえ、近代の民主主義は、古代の民主主義のようにたんなる統治の ① ——一人の支配＝君主政、少数の支配＝貴族政、多数の支配＝民主政——を意味するだけでなく、支配と被支配の関係を根拠づける ② ——「誰が支配すべきか」「どうして服従すべきか」といった問いに対する回答になる——という意味を獲得することになったと説明できるのである。

それでは、正統性原理としての人民主権は、代表制度によってどのように具体化されようとしたのか。言い換えれば、

③

代表制度における政治権力の正統化は、国民が選んだ代表者が議会を構成し、そこでの議論を経た多数決によって法律を制定し、その法律に従って政治を行うという形をとる。教科書にも載っているような馴染みのある話であるものの、これが民主的な代表制度において政治的正統性が産出される本来の手続きであることに間違いない。

ここで注目すべき点は三つある。一つは、議会における多数派が共有のものとしての国民の意思を代表するのであって、それゆえ ④ が国民に共通した意思に基づく決定と見なされている点だ。そのためには、代表者は国民によって直接選ばれ、信任を得る必要がある。これが第二の点になる。最後に、代表者たちから構成される議会で制定された ⑤ に従って政治が行われるという点である。ここに、不偏不党の法律による政治のコントロールという図式を見て取ることができる。すなわち、行政府に対する立法府の優越である。この最大の狙いは、政治権力を脱人格化することで、その私物化や ⑥ を未然に防ぐことにあった。

このような代表制度における政治権力の民主的な正統化は、しばしば議会主義と呼ばれてきた。日本国憲法では、第四一条での「国会は、国権の最高機関」という表現の中にそれを見出すこともできる。では、この議会主義は、どのように実現されるのか。この答えが、選挙によってというものだ。ここから、選挙こそ、代表制度と民主主義を繋[a]ぐ制度上の結節点であり、この意味で、選挙は代表制民主主義を理解する上で鍵となる手続きだといえる。

ただし、選挙それ自体が民主主義なのではない。民主主義の理念を実現する手段として存在する限りで、選挙は民主主義的であるに過ぎない。まず、歴史的に見て選挙は民主主義とは無関係なところで用いられてきた。例えば、ヨーロッパ世界において、それは古代から中世にかけてのキリスト教の教会の司教の選出において活用されてきた。もちろん、そうした近代以前の選挙は、現在の私たちが行っているような、投票者一人ひとりの選好[注]を数えるという形をとらない。そう

（注）選択肢からどれを選ぶかという個々人の好みのこと。

ではなくて、信徒共同体の結びつきを確認するために、満場一致の喝采という形をとっていた。また、理論的な観点から見ても、選挙はある種の貴族主義と結びついてきたといえる。マディソンにせよ、シィエスにせよ、民主主義が近代に復活したときに代表制度を擁護した人たちにとっても、一般の有権者とは異なったエリートによる統治を可能にする手続きとして選挙はきわめて重要であった。この意味で、選挙は近代以降も、一種の貴族主義を政治に温存する手段であったのだ（Manin 1997）。

そもそも、民主的な代表制度の下で選挙が持つ基本的な機能は何か。それは、議会において国民に共有された意思に従い法律を制定し、それに基づいて政治を行う国民の代表者を選出することである。しかし、近代において選挙が民主的な代表制度の手続きとしての機能を十分に果たすには、少なくとも次の二つの条件を満たす必要があった。一つは、平等に参政権が与えられること。もう一つが、選挙が定期的かつ頻繁に行われることである。

一つ目の参政権の平等という条件は、代表者を選出する投票権と代表者として選出される被選挙権との双方において、身分や財産、性別などによって差別されないことを意味する。この条件が選挙の民主主義化に必要な理由は、選挙で選出された代表者が、国民全体の代表者であり、それゆえ、その代表者たちが構成する議会での決定が国民に共有された意思の表明だとする想定ないし擬制を維持するのに[3]不可欠だからである。参政権の平等は、選挙の貴族主義的性格を[B]カン和させると同時に、人民主権という近代民主主義の原理を代表制度の下で維持するために必要な条件だったのである。

もう一つの条件が、選挙の定期的で頻繁な実施である。民主主義の選挙の一つの機能には、代表者を選出するという実際的な機能がある。それは、代表者が政治権力を行使することを有権者が許可し、信任を与えるという機能として説明できる。すなわち、委任の手続きとしての選挙だ。正統な政治権力の行使には被治者の同意と信任が不可欠だとした、絶対王政の時代の自然法学派の思想家たちでさえ、その多くが、そうした同意の表明は一度で十分であるとした。このため、彼らが定期的な信任の確認を求めることはなかった（Manin 1997）。これに対して、近代の民主主義の下では、信任を付与する委任手続きとしての選挙が定期的かつ頻繁に行われる必要がある。裏を返せば、代表者は、定期的かつ頻繁に有権者の審判を受ける必要があるということだ。これは、中世の命令委任から自由委任へ変化したことに関わる。とはいえ、定期的かつ頻繁な選挙は、代表者が政治権力を私物化しないよう有権者がコントロールせねばならないという民主主義の理念から要請される条件でもあることを忘れてはならない。

もちろん、これら二つの条件だけで、代表制度が民主主義の理念を実現できるわけではない。ロバート・ダールによれば、

それらに加えて次のような条件を整える必要がある。表現の自由が保障されること。多様な情報源——新聞、雑誌、ネット——へのアクセスが可能であること。また政党やその他の市民社会の団体が存在することなどだ。こうした条件がきわめて重要であることはいうまでもないが、選挙を民主主義に相応しいものにする上で、先の二つの条件はより根本的である。

ところで、「参政権の平等」と「定期的で頻繁な選挙」という二つの条件に関しては特筆すべき別の点がある。それは、二つの条件のどれを重視するかによって、選挙についての全く異なる理解を引き出すことができるということだ。

参政権の平等という条件を重視する立場からすると、選挙は、国民全体を代表する多数派の利害関心や意思の表明として理解され、その利害関心や意思によって代表者の政治権力の行使は正統化される。別のいい方をすれば、選挙によって表明された国民に共通な意思に従った政治を行わせることで、代表者による権力の私物化や専制を防ぐ。これは、正統性に関する実質的な理解と呼ぶことができるだろう。

定期的で頻繁な選挙という条件を重視する立場からすると、選挙は国民の利害関心や意思の表明というよりは、政治権力を行使してきた代表者の業績に照らして賞罰を与える機会として理解される。賞を与えるか罰を与えるかをめぐっての国民の審判によって、政治権力の行使が正統化されるのだ。[b]換言すれば、この審判によって、特定の集団や代表者による権力の私物化や専制を防ぐ。これは、正統性に関する手続き的な理解と呼ぶことができる。

この相違から望ましい選挙制度も異なってくる。前者を重視する立場は、有権者の投票がより正確に議席数に反映される比例代表制を望ましいとする傾向にある。他方、後者を重視する立場は、死票が多く得票数と議席数が不釣り合いとなるが、政権交代が起きやすい（賞罰を与えやすい）とされる小選挙区制を好む傾向にある。

こうした違いはあるものの、[4]国民の意思の表明という実質的な強い正統性と国民による審判という手続き的な弱い正統性という双方の理解には、明らかな共通点がある。それは、選挙が、権力の私物化による専制政治を防ぐ手段と見なされている点だ。このことが何より重要だ。すなわち、民主主義的な正統性を政治に供給することができる唯一の手続きが、誰もが参加でき、しかも定期的に行われる選挙だとして想定されてきたこと。それゆえ、選挙は代表制度によって民主主義の理念を実現する上での中心となる手続きだと想定されてきたということだ。

（藤井達夫『代表制民主主義はなぜ失敗したのか』による。ただし一部変更した。）

国

問一　傍線ａとｂの漢字の正しい読みを次の中からそれぞれ一つ選び、符号で答えよ。

ａ　繋ぐ

ア　かつ
イ　かし
ウ　つ
エ　つな

ｂ　換言

ア　かんごん
イ　かんげん
ウ　しんげん
エ　しんごん

問二　傍線ＡとＢのカタカナを漢字に直した場合と同じ漢字を用いるものを次の中からそれぞれ一つ選び、符号で答えよ。

Ａ　タン保

ア　事のホッタンは十年前の事故だ。
イ　介護者のフタン軽減が大きな課題だ。
ウ　タンチョウな生活に変化をつけたい。
エ　一年の計はガンタンにあり。

Ｂ　カン和

ア　この先で地面がカンボツしていて危険です。
イ　好きな言葉は「初志カンテツ」です。
ウ　多文化共生社会ではカンヨウの精神が大切です。
エ　カンキュウ自在の戦いぶりで観客を魅了した。

国

問三 傍線1「市民による政治権力の行使の平等性」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 重要な政治的決定をクジ引きによって行なうこと
イ 重要な政治的決定を行うのに市民全員の同意が必要であること
ウ 市民の誰もが権力者になる可能性を有すること
エ 政治権力を私物化する者を投票により追放できること
オ 政治権力を持つ者と持たない者の間に地位の差がないこと

問四 傍線2「近代の民主主義が同意による権力の正統化に非常にこだわったわけ」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 近代民主主義をもたらした市民革命の核心には、政治権力の正統性をそれに従う者たちの同意に見るロックや、その考えをさらに発展させたルソーの思想があり、後に生じるフランス革命もその強い影響下にあったから。
イ 近代民主主義は、それまでクジ等で無作為に選ばれていたため正統化の必要がなかった権力者に、新たに人々の同意という正統性を与えることで、その権力をより強固なものにしようとしたから。
ウ ロックやルソーが提唱した同意としての正統性や人民主権という考えによってこそ、当時の専制政治や権力の私物化に対抗することができたから。
エ 近代民主主義は、それまでは一方的に君主に支配されていた臣民を、権力の行使に同意するという能動的行為の担い手と見なすことで、主体的市民へと変容させようとしたから。
オ 古代の民主主義を復活させるにあたって、当時の新しい思想であったロックやルソーの社会契約論によって権力の正統性を根拠づけることが、多数の人々の支持を得るために必要であったから。

問五 空欄①と②に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア ① 効果 ② 理念
イ ① 規模 ② 計略
ウ ① 目的 ② 法則
エ ① 技法 ② 戒律
オ ① 形態 ② 規範

国

問六 空欄③に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 代表制度は、どのような仕組みで政治権力を人民ないし国民の名において権威づけ、それによって、反専制政治を実現しようとしたのだろうか。

イ 代表制度は、政治において利害や意見の対立が生じた場合に、最高権力者としての君主に頼ることなしにどうやって問題解決を図ったのだろうか。

ウ 人民主権は、民衆の名において権力に一定の制約を課されなければならないという原則を、どのように具体的な制度として実現しようとしたのだろうか。

エ 人民主権は、いかにして一国の代表制度と結びつき、単なる理念ではなくその国の歴史や文化に根ざした現実的な指針へと変化していったのだろうか。

オ 人民主権は、あらゆる政治権力を批判し公正な政治を実現するために、どのようなプロセスを経て代表制度の中に組み込まれていったのだろうか。

問七 空欄④〜⑥に入る言葉として最も適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、符号で答えよ。

④
ア 偏向なき決定
イ 満場一致の決定
ウ 多数決による決定
エ 熟議を経た決定
オ 独立独歩の決定

⑤
ア 非人格的な法律
イ 人道的な法律
ウ 欽定憲法
エ 自主憲法
オ 目的別の予算案

⑥
ア　平板化
イ　擬人化
ウ　弱体化
エ　恣意的な行使
オ　無目的な行使

問八　傍線３「不可欠だからである」とあるが、ここで不可欠だと述べられているものは何か。最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア　選挙で選ばれた者が国民全体の代表者になること
イ　議会での決定を国民全員の意思の表明と見なすこと
ウ　国民全員に平等に参政権が与えられること
エ　人民主権という原理と選挙という具体的制度を両立させること
オ　歴史的に見れば必ずしも民主主義的とは言えない選挙という制度を民主主義化すること

問九　傍線４「国民の意思の表明という実質的な強い正統性と国民による審判という手続き的な弱い正統性」とあるが、次のうち著者が「国民の意思の表明という実質的な強い正統性」とより関係が深いと考えているものにはア、「国民による審判という手続き的な弱い正統性」とより関係が深いと考えているものにはイ、どちらにも等しく関係すると考えているものにはウを答えよ。

一　定期的で頻繁な選挙
二　権力の私物化や専制を防止すること
三　比例代表制

国

問十 本文の内容と合致するものを次の中から**三つ**選び、符号（ア〜キの順）で答えよ。

ア 選挙制度は、近代民主主義の成立以降もエリートによる統治、言い換えれば一種の貴族主義を政治に温存するための手段だった。

イ 近代の民主主義は、古代の民主主義に見られる権力行使の平等性に対する強いこだわりを批判することから始まった。

ウ 選挙制度を民主主義的なものにするための二大条件は、参政権の平等と選挙の定期的で頻繁な実施である。

エ 近代の民主主義は、しだいに参政権の平等を重視するようになった結果、出発点では異質なものだった古代の民主主義に接近していった。

オ （選択肢省略）

カ 近代民主主義の推進者たちは、歴史上はじめて政治権力を正統化する必要性を自覚し、そのことが近代の民主主義を古代の民主主義とは異なるものにした。

キ 現代の民主主義には性格を異にする複数の選挙制度が存在するが、いずれも権力の私物化を防ぎ、民主主義の理念を実現するための手続きと見なされている点は共通している。

（このページは白紙です）

（このページは白紙です）

（このページは白紙です）

《注　　意》

採点・集計などのさいに受験番号の読み間違いが生じないように，受験番号はつぎの点に注意して記入すること。

1．受験番号は２箇所に記入する。

2．HB の鉛筆・シャープペンシルを使って，１マス１字ずつはっきり書く。

3．ほかの数字とまぎらわしくないように書く。

良い例	1	3	4	5	6	7
悪い例	1 (7)	3 (8)	4 (6) 4 (9)	5 (6)	6 (4)	7 (1) 7 (9)

それぞれ（　）内の数字と誤解されやすい。